

【旧約聖書日課】エレミヤ書 23章23～32節

23 わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。

わたしは遠くからの神ではないのか。

24 誰かが隠れ場に身を隠したなら

わたしは彼を見つけられないと言うのかと

主は言われる。

天をも地をも、わたしは満たしているではないかと

主は言われる。

25 わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、「わたしは夢を見た、夢を見た」と言うのを聞いた。26 いつまで、彼らはこうなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、27 互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける。彼らの父祖たちがバアルのゆえにわたしの名を忘れたように。28 夢を見た預言者は夢を解き明かすがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語るがよい。

もみ殻と穀物が比べものになるのかと

主は言われる。

29 このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる。

30 それゆえ、見よ、わたしは仲間どうしでわたしの言葉を盗み合う預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。31 見よ、わたしは自分の舌先だけで、その言葉を「託宣」と称する預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。32 見よ、わたしは偽りの夢を預言する者たちに立ち向かう、と主は言われる。彼らは、それを解き明かして、偽りと気まぐれをもってわが民を迷わせた。わたしは、彼らを遣わしたことも、彼らに命じたこともない。彼らはこの民に何の益ももたらさない、と主は言われる。

【使徒書日課】ガラテヤ書 5章2～11節

2 ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。3 割礼を受ける人すべてに、もう一度はっきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。4 律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。5 わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。6 キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。7 あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないように

させたのですか。⁸このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方から
のものではありません。⁹わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。¹⁰
あなたがたが決して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとし
てあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は、だれであろうと、裁
きを受けます。¹¹兄弟たち、このわたしが、今なお割礼を宣べ伝えているとする
ならば、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。そのようなことを宣べ伝え
れば、十字架のつまずきもなくなっていたことでしょう。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章14～21節

¹⁴弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わ
せていなかった。¹⁵そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロ
デのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。¹⁶弟子たちは、これは自分た
ちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。¹⁷イエスはそれに気づ
いて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分から
ないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。¹⁸目があっても見え
ないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。¹⁹わたしが五千人
に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあっ
たか。」弟子たちは、「十二です」と言った。²⁰「七つのパンを四千人に裂いた
ときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つで
す」と言う、²¹イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

パンを忘れた!?【こども説教のために】

約束の聖霊を与えられたことを知った弟子たちの教会は、世界中に出て行
き、他の人々のために生き始めました。そのことがなければ、今日、わたし
たちが日曜日の教会に集められてくることもなかったでしょう。その弟子た
ちが、主イエスと共に旅をしていたときには少し頼りない者たちばかりだっ
たとしたら、中にはがっかりする方もあるかもしれません。

主イエスと弟子たちが、ガリラヤ湖を舟で渡っていたときのことです。弟
子たちは、パンを持ってくるのを忘れたことに気づきました。舟で移動中に
食事を済ませるつもりだったのかもしれませんが、うっかりしてしまったの
でしょう。舟の中には、だれかが持ち合わせたパンが一つあるだけでした。

気づいた弟子たちは、主イエスに叱られると思ったかもしれませんが。けれ
ども、主イエスは、パンが一つしかないからということでお叱りになること
はなかったでしょう。何と言っても、五千人の人々を五つのパンと二匹の魚
で満腹させてくださったお方です（マルコ 6:41）。四千人の人々を七つのパ
ンと少しの小さな魚で満腹させてくださったこともありました（同 8:6）。

舟の中にあった一つのパンを、主イエスがお分けになられると、弟子たち
は皆、十分に満腹したのに違いありません。

「パン種に気をつけなさい」

それにしても、迷信嫌いの現代人と違って、昔の人は奇跡話や不思議な出来事を素朴に受けとめ、信じていたのでしょうか。

「福音書」は、五千人の人々にパンを与えられた出来事（マルコ 6:30~44）に加えて、四千人の人々にパンを与えられたという出来事を重ねて伝えています（同 8:1~10）。内容はほとんど同じと言ってよいでしょう。興味深いことに、大勢の人々のために食事の用意をするようにと主イエスから命じられた弟子たちは、一度目だけでなく二度目のときにも、「**これだけの人に十分に食べさせることができるでしょうか**」（同 8:4）と口答えしているのです。

一度目の出来事を、弟子たちはまるで憶えていないかのようです。いいえ、憶えていなかったのでしょうか。本当に奇跡を見た者は、奇跡を信じ、再び奇跡が起こることを期待するようになるはずです。けれども、弟子たちにとって、それは奇跡ではなかったのです。無論、出来事の実実は、彼らの記憶に残っていたはずですが（だからこそ、「福音書」には伝えられました！）。

少し思い切って言えば、「福音書」は、弟子たちの奇跡に対する振る舞いを描くことによって、「奇跡を奇跡として信じるのが信仰なのではない」ということを示しているのでしょうか。むしろ、あのパンの出来事は、奇跡話としてではなく、もっと冷静に洞察すべきこと、深い理解が求められる出来事として弟子たちに示されたことだった、と描いているようなのです。

弟子たちは、「**パンの出来事を理解せず**」（同 6:52）にいます。主イエスをして、「**まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか**」と畳みかけられるような状態にいるのが、弟子たちでした。けれども、それも致し方ありません。主イエスにお教えいただかなければ、弟子たちには理解できないのです。

「**ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種に気をつけなさい**」。主イエスは、そうおっしゃられます。パンの出来事を理解するヒントは、この「パン種」にあるというのでしょうか。

「パン種」は、「酵母」のことです。実際には、以前膨らませたパンの一部を取っておいたものが、次に使う「パン種」になります。新しい練り粉にパン種を混ぜて発酵させ、膨らませるのです。「パン種」が引き継がれることで、いつものパンが作られるのです。練り粉にすぎなかったものが、パン種が加えられると、パン種と同じパンになるのです。パン種は、練り粉にすぎなかったものに入り込むと、自分と同じパンを再生産するのです。

主イエスは、もちろん、パン屋の話しをされているわけではありません。古の信仰者がパンに譬えた、もう一つのパン、「言葉」についてお語りになられているのです。

パンは一つ！

パンは「食物」です。食物の「パン」は口から入り、人の身体を作ります。確かに、人は「パン」でできています。けれども、人は「パン」ではありません。口から入った「パン」は、まったく作り変えられてから、人の身体になるのです。ですから、主イエスもこう言われたことがありました。「**すべて外から人の体に入るものは、…腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる**」(マルコ 7:18~19)。

思い出してください。そのとき主イエスは、ただ食べ物のことをおっしゃられたのではなく、別のものが「**心の中に入る**」(同 19 節)、だから、その「**人から出て来るものこそ、人を汚す**」(同 20~21 節)とおっしゃられたのです。

その、人の「**心の中**」に入り込むものこそ、「**言葉**」です。「**言葉**」によって組み立てられている「**教え**」や「**考え**」です。その「**言葉**」を、わたしたちは、「**パン**」のように自分の中に摂り入れては、吐き出しています。消化しきれないほど大量の「**言葉**」という「**パン**」を、耳や目から、無意識のうちについていつのまにか流し込まれては、処理しきれないまま口に出したり、その言葉に従って行動している。その、人の「**心の中**」に入り込んでくる「**言葉**」を、主イエスは、「**パン種**」とおっしゃられたのです。

先日、奈良で痛ましい銃撃事件が起きました。国政選挙期間中でしたが、テレビなどは連日、関連するニュースで溢れていたようです。実は、我が家のテレビは、その前日に突然、映らなくなってしまっていました。インターネットで最低限のニュースは見ることはできますが、テレビをつけっ放しにするのとは、わけが違います。久しぶりにテレビ無し生活になり、少し頭と心がすっきりしたようです。テレビによって自分で取捨選択することのできない、一方的に流し込まれる大量の「**言葉**」と「**映像**」に、普段、どれだけ晒されていたことかと、あらためて思わされています。

ファリサイ派の人々は、「ユダヤ人であればこうしてきた。こうあるべきだ」と、熱心に教えて回っていました。ヘロデ王家は、「わが王家はユダヤの正統な支配者だ。すべてのユダヤ人は、わが王家に従え」と、宣伝して回っていました。現代のファリサイ派は、わたしたちに、何を教えて回っているのでしょうか。現代のヘロデ王家は、何を宣伝して回っているのでしょうか。

惑わされてはいけないと、主イエスはおっしゃいます。「ただ、神の言葉を、命のパンとして受けよ」と、その御手から一つのパンをお分けくださいます。「自分は『**言葉**』を見分けられる」と、驕り高ぶってはいけません。ただ、神の言葉のみによって生きられた神の子、主イエスの御手から渡される命のパンに、わたしたちは信頼するのです。それは、信頼に値するパンです。この一つのパンで十分です。他のものを頼りにする必要はないのです。